

「科学技術系」コンサルタントになるまでの私の履歴書

社会インフラチーム 次長

小林 敬幸

1 はじめに

「科学を活かして、お客様ともに、より良い未来を創造する」。これは、私が所属しているサイエンスソリューション部のビジョンであり、私が業務を実施する上で入社以来、常に意識しているテーマである。当部のメンバーも皆、心の中にこの文字を刻み、日夜励んでいることであろう。

2 私の履歴書

私が担当している業務は、現在は主には技術調査・技術コンサルティングであるが、ここに至るまで、2度ほど分野を変えてきている。

私は入社から約13年間、「土木」、その中でも「山岳トンネルのシミュレーション」を担当した。山岳トンネルのシミュレーションとは、トンネルを掘削した際の影響を、有限要素法という数値計算の手法を用いその地表面沈下等の予測を行い、この結果を分析し、トンネルの設計や現場での対応に活かすものである。数学科出身の私でも、数学を活かしたシミュレーション技術を背景に、入社2年目には様々な会議において、積極的に自らの意見を語っていた。自分は技術ではなく、口を磨いた方がよいのではないかと一瞬だけではあるが思った覚えがある。

その後、約7年間、原子力発電所のリスク評価を担当し、主にはリスク情報を活用した配管の供用中配管検査(RI-ISI)に係る研究のサポートを行ってきた。その後、私が担当した分野の業務が縮小する中、思い切って技術調査や技術コンサルティング業務に舵を切り、今に至るものである。

3 予期できぬ嵐の到来

私が原子力発電所のリスク評価業務から舵を切らなければいけなくなった原因は、2011年3月の東日本大震災である。原子力のリスクってこれからより大切なのではないかとという意見もあると思うが、私が担当してきた研究のサポートは、当時(現在も同様であるが)、1年に1回、原子力発電所の検査を行

うルールの柔軟化を行うことが目的であり、他に優先すべき課題が山積していた当時は、私が約7年間にわたり係わってきた業務の優先順位が明らかに下がるのを感じ始めていた。

そこで、改めて自分のこれまで培った知識・ノウハウは「科学」や「社会」に役立つのかと考えた。「トンネル」×「シミュレーション」+「原子力」×「リスク評価」の応用といえば、「トンネル」×「リスク評価」と「原子力」×「シミュレーション」か?「原子力」×「シミュレーション」は従来から様々なプレイヤーが活躍する成熟した分野であり、自らの出番はないだろう。また、「トンネル」×「リスク評価」、そもそも建設分野では設計の考え方が体系化されており、リスクが生じないための知識やノウハウが蓄積され、シミュレーション技術を活用しているため、新たな立ち位置を築くのは難しいだろう。

4 新たな旅立ち

なかなか新しい仕事が始まらない日が続き、行き詰まりに入り込み、「自分が社会に貢献できることはなんだろう?」と悩み、夜も眠れない日々が続いた。一方、コンサルタントたるもの「稼いでなんぼ」である。行き詰ろうが、どうなろうが、誰も手をあげない仕事に手をあげ、食い扶持を作るしかないのである。

そんな中、次に手を出したのが、「水素」であった。「水素」といっても、水素を作り出す技術開発でも、燃料電池でもなく、水素を都市で使うための有識者会議の「会議運営」(通常は、「事務局業務」という。)である。そこで悩んだことがある、それは、「事務局業務って科学なのかな?」ということである。有識者の先生方はもちろん科学者であり、本プロジェクトでは、当社も水素活用によるCO2削減効果の算定プログラム開発を担当する科学的な貢献を行うメンバーもいるが、私の仕事は事務局運営である。

簡単に事務局運営業務について説明しよう。事務局運営業務とは有識者会議の事務を取りまとめることが仕事であり、有識者会議への参加依頼、日程調整、

会議室の予約、交通費や謝金の支払い事務、当日の資料準備（当時はペーパーレスという概念がなく、7種類の資料×50部もの印刷を深夜に1人ですることもあったと記憶している）、会議の際のマイク持ち、議事録作成等である。「科学」で貢献するという唯一のこだわりがどこにいったのだ！とも思うことなく、会議、会議の連続で忙しさに没頭し、何も考えていない自分がいたのであった。

そんな自分にも巡り巡って東日本大震災の3年後、これまでの自分の専門性を活かせる「発電」×「リスク評価」×「有識者会議」といった業務が自分に回ってきた。東日本大震災以降、自分の専門分野を忘れつつあったが、有識者会議の運営も含め、ようやく、ここで自分の専門性が貢献できる仕事に携わることができた。

5 新たな「科学」へのチャレンジ

「科学技術系」コンサルタントとしての活動が円熟期を迎えた2018年以降であるが、私の周りにもいろいろな専門性があるメンバーが集まり、当部の専門性がさらに広がりつつあるを感じている。例えば、AIや水素・アンモニア等のサステナブルな分野はもちろんのこと、航空宇宙、安全保障、バイオ、核融合などなど、脈略もなく若いメンバーとともに、新しい興味が湧いてくる自分がいた。「新しい技術や課題を理解」し、それを「新たな課題を明確にする」、「人にわかり易く伝える」、「課題に対する解決、ルール化する」ことで社会に貢献していきたいと改めてこのコラムを執筆しつつ思っている。当部の若いメンバーとともに、これから新たな課題の解決にチャレンジしたいと改めて思うとともに、若いメンバーにも、興味があることにチャレンジし、「稼いでなんぼのコンサルタント」として活躍してほしいと切に思い、筆を置く。

（こばやし ひろゆき）